

C.P.I.Mates おおきな かぞく
KELUARGA
クルアルガ BULLETIN NEWS

2008-11
No.6

認定 NPO 法人 C.P.I 教育文化交流推進委員会

発行所: C.P.I.インドネシア事務所

Jl. Manpang Prapatan 15 No.10

本 部: 東京都三鷹市中原 2-16-9 Tel. 0081-422-49-3808

E-mail: cpimate@gmail.com

URL: <http://www.cpi-mate.gr.jp/>

C. P. I. ジャカルタ事務所を、11 月 26 日に開設



90 余名の出席者を前に、話をする小西会長。



在イ日本大使館、野ロー等書記官から、祝辞。

教育里親制度の充実を図り、能力開発の絆を結ぶ、“市民協力の場” としたい

開設式は、政府内務省、日本大使館、世界銀行、全国女性会議指導者およびカウンターパート PPKIJ の地域リーダーたちのご出席を得て行われた。席上、小西会長は、開設資金を寄付してくださった友人に感謝しつつ、教育里親制度プログラムの当初からの目標であった「日本人とインドネシア人の相互信頼の広がりをつくる」活動への意欲を新たにした(P2-P5)。PPKIJ のマルタニ理事長は、奨学生にとっての役割を説明。勉学を継続する受益者としてだけでなく、

(1) 高い能力を身につける方法を学ぶこと

(2) 日本の教育里親および青年との交流

(3) 地域により異なる生活スタイルおよび考え方を
知るための文化交流

これが重要と、プログラムの価値を強調された。さらに、日本大使館の野ロー等書記官から、「この偉大な活動が続いていくことを願う」とご祝辞を戴いた。C.P.I. が協定をしている内務省のスダルソノ局長は、国会開会中の途中から駆けつけ、地域リーダー会議で、政府から補助金を出せるプロジェクトについて説明を行った。



PPKIJ (インドネシア-日本 教育文化センター)、マルタニ フセイニ理事長の挨拶。



開設式のあとの地域リーダー会議で、政府の文化政策補助金の方針を説明する、内務省社会政策局長 スダルソノ氏。

教育里子との話し合いで語られたこと

小西会長は、10月から11月の間、教育里子たちの全地域を巡回。C.P.I.とPPKIJとの活動における重要な事項を話しましたので概要を報告します。（教育里子には英文で渡しました）

ジャカルタとボゴールの合同会議にて

市民協力の輪を広げる施設ができました

今日のこの会議は、C.P.I.の新しい施設の、教育里子による開設ともいえます。（公的開設式は、11月26日）
C.P.I.のジャカルタ事務所は、次の活動の基地です。

- 1) C.P.I. Japan の、インドネシアにおける活動基地
- 2) PPKIJ の地域リーダーの方々のジャカルタの拠点。

私は、長年 PPKIJ の活動を支えてきた彼らのためになることを、喜びとするものです。

- 3) また、この施設は、『市民協力のための集いの家』でもあります。インドネシアには、発展途上地域の人々に能力開発を行いたい日本の方々がおられます。

一方、自分の能力を向上させることが必要な、多くの地域があります。

C.P.I.は、その両者をコーディネートできます。

そうすることで、日本人の技術者が、適切な活動を、安全に効果的に行うこととなります。その方の活動は C.P.I.と政府内務省との間で締結した協定書により、政府からもサポートを受けることになります。

教育里子の卒業生は、いまは大学生あるいは社会人と思いますが、この新しい活動にぜひ参加して下さい。そうすれば、皆さんは、社会活動を行っていく上での良い方法を学ぶことになるでしょう。

共に前進していきましょう。



C. P. I. のジャカルタ新施設にて



C. P. I. ジャカルタ新施設の外観



ボランティアの人々の宿泊所は二階に

チアンジュールでの会議にて

—— 施設を大切にしていきましょう

この地域の皆さんは、他の地域に較べて、有利な点があります。1997-1998 年にかけて、日本大使館の支援により建設した、職業訓練センターがあることです。

10 年間、私たちはこの施設で様々な経験をしてきました。ありがたいことです。但し、10年を経て、建物はだいぶ損壊してきました。これは、施設のポテンシャルをあげる、よい機会であります。皆さんがこの施設をどう使うかを真剣に考えてください。私は、常設の学校、例えばハイレベルのイスラム教室をつくり、この施設を愛する人々を増やしていきたいと考えます。

NOTE: イスラムの高い位をもつ牧師であるアナム氏は、この活動を推進することを約束した。

また、あなた方が、自分たちで施設を修理することを期待しています。C.P.I.は修理材料を支援することはできません。初めは皆さんの行動が重要です！ 頑張ってください



チアンジュールの職業訓練施設における会議。左端アナム氏、
右端地域 地域リーダーのハルノさん

マラン、ジュンベールにおける会議にて

— 教育里親と教育里子の心の交流を増やそう —

各地の会議で、教育里子の皆さんに、教育里親さんへの手紙を出すようにお願いしてきました。

私は、多くの教育里親さんから、教育里子たちの家族の状態、とくに良い変化を知りたい、と聞いています。あなた方からも、日本の教育里親の様子を知りたいと、よく言われます。

そこで私は、双方の近況を知らせるための用紙を作りました。最初は、ここで、あなた方から始めてもらいます。それらを教育里親の皆さんに送るときに、同じことを教育里親の皆さんにお願いするつもりです。

C.P.I.とPPKIJは、20年間、フォスターケアプログラムをしてきました。卒業生は4500人を超えます。私たちは、日本とインドネシアの間で行ってきたこの偉大な活動を続けていかなければなりません。そのためには、教育里親と教育里子の間の心の交流が大事です。その活動は、教育里親制度プログラムに参加していきたい気持ちを育てていくものだと思います。どうもありがとう



マラン。中央、リーダーのアダムさん



ジュンベール。リーダーのエンダさん

2007年の卒業者会の成果をブミアユで見た

— 教育里子報告のモデルとしていきたい —

いかなる活動においても、100の講義より、ひとつの良いモデルを観ることが、最も効果的です。

私は、昨年の7月から各地で卒業生会合を重ね、教育里子の家庭報告を作って戴くよう、お願いしました。2007年11月の卒業生集会では、2008年の活動方針として、その報告作成が提起され、推進が決まりました。

そして今日、ブミアユですばらしい成果を見ました。なぜこのような素晴らしい結果が出たかと考えますに、

- 1) 地域リーダーのマジッタさんご夫妻が、教育里子の家庭を訪問インタビューする意欲を持って下さったこと。
- 2) 卒業生のフィトリアナさんが、英文への翻訳をすべて引き受けて下さったこと。

このふたつにあると確信しています。

C.P.I.の活動は、地域リーダーご夫妻と、卒業生のボランティアなくしては、成り立ちません。

私は、ほかの地域の方々に、ブミアユでの成功を参考に家庭訪問レポートを作ってくださいよう、お願いして行く考えです。

どうもありがとうございました。



子どもたちから相談を受ける小西会長。ジュンベールにて。



ブミアユで里子報告を作成した、左からリーダーのマジッタさんご夫妻、翻訳した卒業生のフィトリアナさん。

バンドンの会議にて

― 青年の活力は、より良い活動を創造する

バンドンのリーダーであるワーワンさんは、1989-1993年にC.P.I.が呼びかけたインドネシア-日本間の青年交流プログラムの受入・派遣を円滑にするために毎年参画された、先駆的な方です。それは、偉大なことでした。

その成果により、C.P.I.は、1993年の、『アジア青年交流年 in インドネシア 1993』に、日本から唯一の代表団(30名)を派遣することができたのです。

そのとき、ワーワンさんは30歳台、私は40歳台でした。

C.P.I.とPPKIJの協力を歴史的に見ても、私たちは、青年交流により青年ボランティアを活性化させ、その青年たちを以ってインドネシアでの教育里親制度プログラムを育てていったと言えます。

しかし残念なことに、1994年以降に『民間青年交流』への助成金を出す機関がなくなり、C.P.I.にとって大きな痛手でした。(東京都の交流振興助成もなくなった)

C.P.I.は、この状況に挑戦します。C.P.I.の考え方、やり方に共感する人々を結集することが肝要です。

そこで、インドネシア政府との協働協定に基づき、『第一回市民協力フェスティバル』(東京都後援、代々木公園、2008年7月19-20日)を開催しました。

会場には25,000人の人々が来てくださいました。

(日本語新聞 The Jakarta Daily News 記事)

バンドンから来てくださった歌手のリア アプリリアさんには、イベントを盛り上げてくださり、感謝しています。

イベントのあと、日本-インドネシア間の持続的な市民協力プログラムについて、電話して下さる方が増えました。私は、その人々に、教育里親制度は、日本人とインドネシア人の相互信頼を高めるプログラムですとお伝えするようにしています。

ところで、文化的あるいは社会活動面での交流は、純粋に『市民協力プログラム』であることが必要です。政治的あるいは商売的な思惑を除かねばなりません。強く信念を持って係っていきましょう。

若い世代のエネルギーが、青年交流プログラムを、推進できるのです。共に頑張りましょう！



バンドン。右から二番目ワーワンさん



東京・代々木公園でのイベント。下写真も。



ジョグジャカルタに、卒業生活動をみる

—— 地域リーダーは、アシスタントを育てよう

PPKIJ の各地域を廻っておりますと、ご夫婦で地域リーダーをされている所は、実に活動的だと感心します。生き方、暮らし方に女性の役割は大切なものだとの印象を受けます。ジョグジャカルタでは、教師としても優れた指導者であるスティクノさんご夫妻が、20 年もの間、教育里親制度プログラムを手伝ってくださり、「教育に携わる者として、子どもたちを支援するのは当然のこと。幸福です」と云われ、頭の下がる思いです。

感銘を受けた思い出があります。2006 年の中部ジャワ地震によって悲惨な日々をおくった教育里子の家庭に対して、C.P.I.が物資を支援した際、ご自宅も倒壊しているにもかかわらず、教育里子家庭の倒壊家屋の救援を、卒業生を指揮して黙々と準備されていました。

私はその活動を支援できて、得難い経験ができました。

2008 年の夏、おふたりは、ご自分たちの代わりに卒業生のシギット君を、東京・代々木公園で行われた交流プログラムの参加者として選ばれました、私は、シギット君が4500名の卒業生の代表を立派に務めてくれたことを皆さんに報告いたします。 ご夫妻に感謝します。



スティクノさんご夫婦と、教育里子たち



教育里子卒業生。ジョグジャカルタのシギットさん。日本の「市民協力フェスティバル」で、活動説明のため来日。

スマランの会議にて

—— “良きアシスタント” とは？

PPKIJ の地域リーダーは、20歳台の年齢のときから教育里子たちの面倒をみています。いまは社会経験も深まり、社会人としてのネットワークも広い。この方々は、いま、卒業生出身のアシスタントを必要としています。卒業生には、その出身学科によって、会計や調査など能力を発揮してほしいのです。

よいアシスタントがいる地域では、地域リーダーは、より速く円滑に役割を果たすことができます。

そして、卒業生の活躍は、教育里親制度プログラムに係るだけでなく、発展途上地域の住民に対する能力開発プロジェクトでも重要です。

スマラン高地の世界銀行 JSDF による生活向上事業でも、下記の成功要因の(3)に、卒業生が係っています。

- 1) PPKIJ の地域リーダーは、農民を勇気づけた。
- 2) 市長は、私によく協力して下さり、担当部署を早く設置してくださった。おかげで、プロジェクトに係る中央政府への申請などの作業が円滑にできた。
- 3) PPKIJ Semarang の専門家チームやアシスタントたちが、報告の作成や民衆への連絡を適格に行った。

皆さんの活躍に期待しています。



副市長さんが、会議に出席されました



地域リーダー・ダルヨノさんと里子たち

教育里親の仲間が増える

受益する子どもたちが増えることが大切

インドネシアにおける C.P.I. の今期の柱は、

- A) インドネシア内で、C.P.I. の主導により、教育里親制度を活用した『貧困かつ優秀な中高生への教育支援を行い、受益者を増やす。
- B) C.P.I. 会員あるいは C.P.I. が推薦する専門家による能力開発プロジェクトを推進する。
- C) インドネシア各地の卒業生リーダー交流、日本ーインドネシア間で C.P.I. の教育支援に関係する人々同士の交流を図る。

こうして活動全体を生き生きしたものにし、受益する子どもを増やすことを目標にしています。

教育里親への責任を果たす、と卒業生

ジャカルタ事務所の開設式で卒業生代表の挨拶をしたラティさん(現・ボゴール農大の講師)は、「日本の教育里親さんを慕っています。日本には、来年、京都大学に研修で行くのでお会いしたい……(絶句)」と涙ぐんでいました。



政府の協力を表明する内務省のグデ部長さん



全国 84 の女性会議の連合代表者も協力を表明



大使館からのご出席も得てジャカルタ新事務所の開設



里親さんに会いたい、と涙ぐむラティさん

日本の教育里親たちに報いるためにも、インドネシア内の卒業生たちは、国内の教育里親への参加を呼びかけ、自分たちの昔と同じ境遇にある子どもたちを助けなければならない、と話しました。

インドネシア政府のバックアップ体制

政府内務省の教育文化政策部長のグデ氏は、C.P.I. との協定に基づき、次の約束をされました。

- A) 地方活動への協力を地方政府に指示する。
- B) 卒業生大会の資金に、全面的に協力する。
- C) C.P.I. が行う、日本ーインドネシア間の交流の円滑のために、協働を行う。

全国 84 の女性会議が、協力を開始

本年7月の東京での「第1回日本ーインドネシア市民協力フェスティバル」に参加して、C.P.I. との関係を深めた全国女性会議連合会(傘下に、84の女性会議がある。各地の有力者の婦人で構成。社会奉仕活動を積極的に行っている)は、国内の教育里親呼びかけを、約束して下さいました。

日本—インドネシアの架け橋に



7月19-20日、東京・代々木公園での第1回 日本—インドネシア市民協力フェスティバル。
C.P.I.の4連テントでは、たくさんの青年ボランティアの皆さんが、活躍してくださいました。

The Daily Jakarta Shimbun 第2906号

2万5000人が集まる

踊りまくるインドネシア人

東京の代々木公園屋外ステージを中心として七月十九、二十の両日、「デリマカシ日本、ありがとう インドネシア」をテーマにした第一回日本—インドネシア市民協力フェスティバル（後援：スナタ舞踏団）が、約二万五千人が集まり、来日したインドネシア舞踏団のバリやスナタの踊り、ガムラン演奏からミー・パツソやサテの屋台まで、インドネシアの文化を堪能した。在日インドネシア人は、島の被災地のアチエとニア島の復興支援に参加した。二日にジョクジャカルタ移動し、菅原講師の解説、ボロボドゥール遺跡を巡る。旧日本軍の御用商人、インドネシア独立戦争時に後方部隊に従軍した。

古里の味に舌鼓を打ち、ステージでインドネシアポップスの演奏が始まると、総立ちになって陽気に踊り始めた。日本人の観客は「南国ならではの乗りの良い国民性が楽しい」と感心していた。

別会場では、NPO（非営利組織）の「CPI教育文化交流推進委員会」による教育里親制度という奨学事業の二十周年記念行事が開かれた。長年、インドネシアの子どもの里親として貢献してきた日本人八百三十人が表彰された。この事業でこれまで、奨学金を受け

KITのタタン・クルニアデイ委員長は「音声記録を出し、回した人物は限つたが、KITの信頼を失墜させる目的があったに違いない。出回った、善悪記録はまつたので、ためたものであり、でつち上げた」と批判した。

たインドネシア人の里子の数は四千六百人に上る。同委員会代表の小西菊文さんは「このように、市民個人の小さな力が集まって、大きな成果へと結びつき、息の長い活動へつなげる事ができる。」

第二回以降では一般企業にも、各社の社会貢献事業成果の発表の場として、広く参加を呼び掛けたい」と語った。（東京で松野木京子、写真も）

スナタ舞踏団の踊り

若い気持ちの結集を！

インドネシア

現地事務所から

教育里子から地域リーダーになられた、マランのアダムさんをご紹介します



日本の市民協力フェスティバルで、日本の青年ボランティアたちと。左から二番目アダムさん。
左端は、PPKIJ 職員のアクマドさん、
右端はジョグジャから派遣されたシギットさん。

教育里子に推薦されたのは 1993 年
アダムさんは、当初ジュンベールで住んでいました。下の地図で右から6分の一、南の方に位置します。現住所のマランは、そこから西に 6 時間ほど行ったところです。

高校一年のとき C.P.I. の教育里子として
学校から推薦を受け、奨学生になると同時に地域リーダーのアシスタントを引受け、教育里子会の運営に参加しました。

1996 に高校を卒業し、マラン大学に入学の後、科学系のため 2003 年まで在学。C.P.I. からの奨学金を、大学 5 年生まで受けました。
家は貧しかったので、自分が頑張ろうと思い、資金なしで独立可能なコンピューターエンジニアの学科を選んだとのこと。



早くから、自立の道を選んだそうです。
大学一年生のとき、地元のコンピューター会社と交渉して、『パソコン貸出し業』を始め、C.P.I. の奨学金が終了する 2001 年から、携帯電話の修理ビジネスに転換、顧客の評判がよかったので携帯電話の卸元から信頼されて販売にも進出。
2002 年に(大学在学中)現在の奥様と結婚して、現在に至っています。
奥様は、携帯のビジネスを助けておられます。

非常に真面目で堅実な人柄。

PPKIJ のマランのリーダーに就任したのは 2000 年で、大学 4 年生のときです。
教育里子たちからの信頼は厚く、3 年前までは、子どもたちの集会を、わずか二坪ほどの自分の店で行っていました。その当時、車もなくバスで移動していたアダムさんですが、いまは車も持ち、そのローンが終わる来年には、銀行で長期のローンを組んで家を建てたいと、語っていました。